

クリシュナ神の永遠なる恩恵 『マハーバーラタ』の物語より

高潔なユディシュティラを長とする正義のパーンダヴァ兄弟は、ハースティナプラ王国の正当な継承者でした。しかし、彼らの幸運をねたんだいとこのドゥリヨーダナによって、12年間にわたって森の中に追放されました。

パーンダヴァ兄弟に忠実な賢人たちは、追放される兄弟に従いました。自分の家族と賢人たちを食べさせていく務めをどう果たせるか分からず、ユディシュティラは太陽の神であるスーリヤに恩恵を懇願しました。スーリヤ神はユディシュティラの祈りを聞いて、彼の前に現れました。彼が身に着けている甲冑(かっちゅう)は黄金の炎で、手には太陽である彼自身のように光り輝く神秘的な器、尽きることのない器であるアクシャヤ・パートラがありました。

スーリヤ神は語りました。「パーンドウの長男よ、この神聖な器を見なさい。これは神の永遠なる恩恵の象徴だ。この器から、おまえたち兄弟は毎日の食物を取らなければならない。おまえたちの妻、ドラウパディーに、賢人全員の給仕をさせなさい。皆が満腹になったら、私たちの習慣のように、ドラウパディーが最後に食べなさい。私は約束する。そうすれば、あなたたちが空腹に悩む事はないだろう」

パーンダヴァたちは太陽の神の贈り物に感謝して、毎日神の指示に従ってアクシャヤ・パートラから食物を食べました。パーンダヴァたちと賢人全員が食べ終わると、ドラウパディーが彼女の分を食べました。その後、器は空のままでしたが、翌朝には不思議なことに、また食べ物で満たされるのでした。

アクシャヤ・パートラの話がハースティナプラに届いた時、邪悪なドゥリョーダナは怒り狂いました。彼はパーンダヴァたちにもう一つのわなを仕掛けました。彼は強力な賢人、ドゥルヴァーサー・ムニに敬意を表すことにし、彼と彼に従う1万人の信者に食物を提供し、恩恵を得ようと期待しました。ドゥルヴァーサーの怒りは世界中で有名でした。ほんの少しの無礼にも呪いをかけたので、王も神も彼の激怒を恐れていました。しかし、ドゥリョーダナのささげ物に満足して賢人は言いました。「私はとても気に入った。何でも希望を言いなさい。それはかなえられるだろう」

ドゥリョーダナは、この瞬間を待っていました。敵を壊滅できる見込みがたったのです。

彼は深くお辞儀をして、ドゥルヴァーサーに言いました。「おお、偉大なるサードゥよ、ヨーギの皇帝よ。私の望みはこうです。森に住むパーンダヴァたちを訪問なさってはいかがでしょうか。彼らは私の親しい友達で、とても信心深い人たちです。あなたの訪問は彼らに大きな喜びを与えるでしょう。どうか、ドラウパディーが食事を終えた後、訪問してください。彼女はあなたに最高のおもてなしをするでしょう」。賢人はうなずくと、次の日にパーンダヴァの小屋を訪ねようと、彼の1万人の弟子を連れて出発しました。

次の日の夕方、ユディシュティラは賢人がやって来るのを見て、兄弟たちと急いで出迎えました。この華々しい大勢の客を出迎えるのにあわてて、ユディシュティラは、ドラウパディーがちょうど食事を終えたところだったのを忘れていました。ユディシュティラは手を合わせて、ドゥルヴァーサー・ムニを歓迎して言いました。「賢人よ、どうか川で水浴びをなさってください。その後で、あなたと弟子の皆さんに食事を差し上げましょう」

ドラウパディー妃は大勢の客にあいさつするために小屋から出てきました。ユディシュティラの招待を耳にすると、彼女は恐れおののきました。アクシャヤ・パートラは空っぽでした。空腹な

賢人と彼の弟子たちに食べさせる物は何もありませんでした。ドウルヴァーサーは家族全員を呪うに違いありません。

ドラウパディーは走って小屋に入ると、プージャーの前にひざまずいて、パーンダヴァたちのグルであるクリシュナ神に一心に祈りました。

シュリー・クリシュナ、
限りない力の持ち主、
あなたは悩める者の疲れを知らぬ英雄、
あらゆる世界と創造物の保護者、
高きものの至上、あまねくものの偉大な守護者。

あなたの保護の下で、おお神々の主よ、
すべての悪が恐ろしさを失う。
すでにいくたびも私を救ってくださったように
この難儀から私を救ってください。

彼女の祈りを聞くと、クリシュナ神はドラウパディーの前に現れました。彼はあらゆる天上のものと同じように輝き、まさに真理と正義の具現でした。断固とした愛情のこもった声で、神が言いました。「ドラウパディー、私はお腹がすいた。早く、何か私を満たす物を持ってきておくれ」

ドラウパディーは訴えました。「でも神よ、食べる物は何もないのです。アクシャヤ・パートラは空っぽで、ドウルヴァーサーは私たちを怒るでしょう。どうか助けてください」

すべての心に宿る神であるクリシュナ神は再び命令しました。「早く、早く、お腹が鳴っている。スーリヤの器を持ってきなさい。きっと何か残っているはずだ」

ドラウパディーは考えました。「神を完全に信じて、彼の命令に従うのが私のダルマだ。彼は見えないものを見て、不可能を可能にする。私は彼の望み通りにしよう」。彼女はお辞儀をするとアクシャヤ・パートラを持ってきて、彼女のグルにささげました。シュリー・クリシュナは、指で器の縁をぐるりとさわりました。ドラウパディーにほほ笑みかけると指をかざしました。1粒の米がくっついていました。神はその米粒を喜んで食べ、それを味わいながら叫びました。「どうか宇宙の魂であるハリが、このささげ物に満足するように」

パーンダヴァたちの中で最も強いビーマは、この神聖な戯れを目撃していました。クリシュナ神は彼の方に向いて言いました。「早く行ってドゥルヴァーサーとその一行を食事に招待しなさい」

その間、ドゥルヴァーサーとその一行は川で水浴びしている時、急に食べたい気持ちが無くなりました。弟子の1人が問い掛けました。「おお、尊い賢人よ、どうしたらよいのでしょうか。皆、満腹です。食べ飽きています。パーンダヴァの供宴を受けるのは無理です」。リシは答えました。「招待を受けて、今になってそれを断るのは重大な過ちだ。ユディシュティラとその兄弟は徳の高い者たちだが、戦士だ。この不誠実な行為は彼らを激怒させるかもしれない。彼らが戻ってくる前に逃げてしまおう」

ビーマは、クリシュナ神から言われて川岸に行きましたが、ドゥルヴァーサーとその一行がパーンダヴァの住む森からあわてて逃げていくのを見ただけでした。ビーマがこのことをユディシュティラに報告すると、ユディシュティラはどうしてこうなったのかを尋ね、ビーマはクリシュナ神が現れ、介在したことを話しました。すぐに、パーンダヴァ兄弟はグルに感謝をささげダルシヤンを受けるために小屋に向かいました。

聖なる神はにこやかに彼らを迎えました。ドラウパディーは、どのようにクリシュナ神が現われて、アクシャヤ・パートラに残っていた1粒の米をおいしそうに食べたかを話しました。パーンダヴァたちの眼は感謝で涙があふれ、そして彼に頭を垂れました。

クリシュナ神は言いました。「ドラウパディーが心から祈ったので、私はここにいるのだ。彼女のささげ物はつつましいものだったが、彼女の信仰と敬愛は私を喜ばせた。彼女が私を信じる心は揺るがなかった。自らの義務を神へのささげ物として愛をもって行う時、それはほんの小さな善行でも多くを高める力となるのだ」

「ドラウパディーはあなたたちと同じようにダルマを守った。おお、立派なパーンダヴァたちよ。常に覚えていなさい。アクシャヤ・パートラのように、神の恩恵は不朽で永遠だ。そして高德の者、神に救いを求める者に、勝利は確実だ。繁栄が常にあなたたちにあるように」

ユディシュティラはクリシュナ神に言いました。「神よ、あなたは平和の源であり繁栄の住みかです。私たちは何度も頭を垂れます。そして常に心の中であなたを覚えていますように」

すべてのものは永遠なる神の内に存在します。まさに、ドラウパディーのささげ物に対するクリシュナ神の満足は、最も思いがけない方法で1万人の空腹を満たし、パーンダヴァたちを救ったのです。

『マハーバーラタ』は偉大な賢人ヴェーダヴァーサによってサンスクリット語で書かれた叙事詩です。『ラーマーヤナ』とならんで『マハーバーラタ』は、インド文学の最も有名な作品の一つです。それは物語と教えに満ちており、精神的な富である『シュリー・バガヴァッド・ギーター』も含まれています。

改作: Morgan Hooper
デザイン: Hira Tanner

© 2018 SYDA Foundation. 著作権所有。